安全管理レポート
（安全管理マネージャー・村越真）

「好事魔多し」という言葉がある。安全工学的にこの言葉を捉えれば、条件のよい時は油断するために、悪いことが起こりやすいので気をつけろという意味にとれる。アウトドアスポーツでの経験で言えば、条件のよい時は参加者も「イケイケ」で走るために、つい限界まで走ってしまい、事故につながると解釈することもできる。9 月のミーティングで、特別なリスクはないと聞いた時、まず頭に思い浮かんだのはこの警句だった。

ここ数回の OMM を思い出せば、標高の高い霧ヶ峰では低体温症が懸念されたし、奥三河や本栖では難度の高いエリアでの未帰還が心配された。奥美濃ではリモートで急峻故のけがや救助体制のことが懸念された。具体的な懸念があれば、対応はしやすいし、安全管理も臨戦態勢で臨める。一方で、今回のように、具体的なリスクがないとどうしても気が緩む。おまけに今年の秋は高温が続き、ピクニックのような条件ではないか！

結果的には、心配は杞憂に終わった。安全管理の記録も、ここ数回の中でも最も少ない部類である。けが二日間で 9 件。転倒による顔面の打撲という一歩間違えば深刻な事態に至るレベルのけがもあったが、それ以外は比較的軽傷でイベントから直接搬送が必要なけがは発生しなかった。ただし、直前の低温化で予想された低体温による不調は 2 件ほど発生したが、パートナーと救護の連携により重大な状況になることなく解決した。

規則上の違反行為に、装備の不備とパーティーの分離がある。前者は 7 件、後者は 2 件が報告されており、いずれも残念ながら失格対応となっている。数こそ、数年前と比較すれば限定的である。この事は OMM の考え方が浸透してきた成果として歓迎したい。一方で、これらは重大事態につながってもおかしくない安全上の問題である。必須装備はもしもの時に命を守るために必要なものばかりである。それがないことは重大事態の一歩手前にいたのだと言っても過言ではない。パーティーの分離も同様である。

特に注意を喚起したいのは、エマージェンシーシートを携帯しながら、それがルールで定めている BB(袋状のもの)でなかった事案が 5 件であった。その多くは、意図的というよりも、ルールの読み込みが不足していたことに起因すると思われる。

チャレンジする以上、致命的な事態から自らを遠ざける努力が必要である。改めてルールを熟読し、何が必須装備として要求されているのかを確認するとともに、それがなぜなのか？その背後にレースのどんな特徴があるのかを考えていただきたい。